

堺市附近海岸の貝類

黒田徳米

貝類分布の上から堺市附近は一言にして云へば二枚貝の郷土である。そして貝類全體の上から見て多くの場合そうである如くに堺の二枚貝群も、種類こそ多數ではないが其個體の數量に於ては誠に豊富である、養殖せられたとか又は保護が加へられたと云ふ例を聞かぬにも拘はらず斯の如き有様は蓋し直接或は間接の原因としては大阪てふ海内無比の大都會を其附近に控へて彼等の食餌となるべき種々雑多なる有機物質を流し、以て其繁殖を助長せしめつゝありと云ふことを擧げざるを得ない。

堺市附近海岸は直接には大和川、間接には北方に淀川と其各支流及び神崎川等の影響を受け爲めに其産する貝類は概ね河口性である、而して其附近岩礁に乏しく、海岸線は屈曲少なき砂汀續きであるため匍匐的な巻貝には恵まれない

で却つて穿孔的な二枚貝類のためには天恵豊かな樂天地なるが如くである。

余は堺市史編纂委員からの囑を受けて該方面の貝類を調査するため最初同委員中村喜代三氏及び京大工學部助教授上治寅次郎氏の東道を得て昨年十二月初旬大濱公園以南濱寺公園に至る間を、更に本年一月三十日は單身堺港から以北大和川川口に至る間の汀線を縫つて極めて姑息的ではあつたが、單に海岸の砂上に打揚げられた貝類を拾ひ集めて見たのであるが、幸にも堺市には水族館を有し其當局の厚意を以て同館が從來蒐集し、且つ陳列してある貝類標本を參觀することを許され、其中より『和泉』産の種類を書き抜き得たことにより稍や其一般を窺ふに足る結果を得た次第である、元より僅々二日間の採集に止まり、且また寒候に偏した一時期に

於ての實驗の結果であるから全般的から云へば甚だ不完全なものたるは論ずるまでもない、若し今後此方面に於て特志の士があつて漁舟が空しく捨てゝる漁屑と、波浪の戯の後を細大洩さず且つ久しきに亘つて注意することが出来たなら恐らく今日に倍し或は三倍する種類を此の海岸から報告することが出来やうと信するのである。そは此の度の採集の結果發見することが出来なかつたが、然しどうしても棲息して居なければならぬと分布上推測せらるゝ種類がなほ多數あるからである。知り得た貝類の凡ては終りに列記した目録の通りであるが、就中多少注意に値するもの數點を左に述べて見やう。

採集の結果此の海岸の貝類の大部分は河口貝類であることは前にも述べた所であるが、其中特に注意を惹いたことは、堺の港を中にして北と南との兩海岸には貝類の種類の間に相當著しい區別のあることであつた、即ち南海岸大濱間に於てはトリガヒとタヒラギの二者が著しく眼につくに反し、北海岸には殆ど其影を認むるこ

とさへ得ず其の代はり此の海岸にはマテガヒ、シホフキ及びイソシヤミが實際多量に産するのを見た、此の對照は絶對的とは云ひ得ないが、然し餘り著しい現象に驚かされた次第である、此珍現象は今様貝塚の堆積にも現はれて南方に於けるものと北方に於けるものとは其内容に於ても此事實を物語つて居るのを實見した、然し茲に一つ注意を要することは此地古より貝の產地として相當聞えた所とて古書にも載つて居るが今も貝の剝身を家業とする幾戸かゝあつて、其附近より漁獲せらるゝ材料では不足を告ぐる場合交通の便を利用して遠く他の地方より養殖に係る材料を輸入して爰で改めて剝身とし、大阪方面に販賣するものがあるから、たとへ此地で拾つた貝殻と雖も俄に該地の産だと斷定するのは早計である、余等の訪ふた貝殻堆積所での一老漁夫の問はず語りに茲に積まるゝ『さぶらう』(サルボウ及びハイガヒ)は伊勢の北から(實は兒島灣に盛に養殖せらるゝもの)移入せられたものだ云つて居たのを見ても此の間の消

息を窺ふことが出来る、尤も伊勢の海産の種類も移入せらるゝことは明な事實で、オホスグレ貝の如きは其方面からのものらしい見受けられた又此の海岸ではつひぞ見受けなかつた多少の貝類も紀州方面からのものらしい思はれた。

堺附近の貝族は地理的の相似からして多くの點に於て伊勢の海のものに甚だ近似して居ることを發見したが、中にも『八千代の花貝』は横山博士が絶滅種として三浦半島から報告せられた化石の後裔とも見らるゝもので從來三重縣の熱心なる蒐集家金丸但馬氏の新發見としてのみ知られたもので種を異にするほど變はつて居まいと思はれる。また『翁の面貝』は邦人化石學者間では *Parape generosa* として知られて居るもので *Adamuss* 氏の *P. japonica* の老成したものゝ如くであるが武藏野を始め各地の化石層中に屢見出さるゝもので、現生殻は瀬戸内海、伊勢の海、樺太等の産を實見したが堺の海岸にも産することは今回初めて知つた次第である。泥筭は有明の海に最も普通で瀬戸内海では兒島灣

と伊豫寄りの海岸の泥深い所に産するが水管が肥厚強靱なるに引かへ貝殻は極めて脆弱薄質なため完全に採集せられることが甚稀である、で多くの人はウミタケは知つて居るが其貝殻を知つて居る人が少ない様である、其老成した貝殻の一片の完全なものと數片の破片とを採集し得た、此の貝は從來 *Pholas latissimus* として知られてゐたが邦産のものは果して比律賓諸島産の該種と同一物なるや否やの點はなほ疑はしい、これは其問題の解決せらるるまでは横山博士の化石種 *Japonica* (横山博士は屬名を *Pholadomya* として居らるゝが恐らく其屬ではなからう) の名を用ひる方が良策と信ずる、それは比島産のものに比し邦産のものは後部の開きが少し狭く殻も全體として後部が細り氣味であるのと更に邦産は巨大に老成するからである、此の貝は先年中村先生に御供して紀州へ地質旅行をした節南部町附近の洪積層で印象を採集したことがある(地球一卷二號一七〇頁)。タヒンギ(玉珙)は有刺型で所謂リシケタヒラギと稱せられる種で

あるが、無刺平滑の普通タヒラギとは推移連續して區別が出来ない、單なる變種に過ぎまいと思はれる、此の類は殻頂に縱裂を有たないため Pima 屬から區別せられて居る。ハンレイマクラはドウンケル氏のハンレイに比しては後背部截切狀部が多少違つて居て、またリイヴ氏のニ

なほ淡水産では堺市の北、三寶村に屬する新田の間を通ずる溝渠の中では暖地性の川螻タケノコカハニナと小螺カハザンセウ貝を採集したが何れも新しい産地である。セタシバミは此の方面の捨て貝の中で見受けたが恐らく琵琶湖乃至該湖系所産の移入品であつたらう。

寶 螺 類

大連は北
り連公國
に在る
大連市に
至る
水産部
集積

原 綴 帶 目

未だドウンケル氏の圖に匹敵するものを見たことがない、キクザル（菊猿）は邦人學者間では semipurpurata として知られて居るがリシケ氏の原型は所謂キクザルではなくて、名の示す如く半ば白色、半ば紫彩した美しい貝で鮮かな朱紅色を呈した dunkeri の色彩的變種かと思はれるほど近似した貝である。それにキクザルは全部褐色を呈し類圓形で全く別物である。これは多分ライン氏の採集したと報告せられた aspersa に當るものであらう、但し比律賓産の該種とは果して同一物か是れ亦甚だ疑はしい。其他オチバガヒ、クシケマスホ等の此方面にも分布して居ることは新しい發見であつた。

- | | | | |
|---|---|---------|---|
| 1 | Arca kraussi Krauss. | ネガアサリ | + |
| 2 | " (Barbata) obtusoides Nyst. | カリガキエガヒ | + |
| 3 | Arca (Barbata) stearnsi Pilsbry. | ハチエガヒ | + |
| 4 | " (Scapharca) subcrenata Lischke. | サルボリ | + |
| 5 | " infata Reeve. | アカギ | + |
| 6 | Atrina japonica (Reeve) + (Lischkeana Clessin). | タヒラギ | + |
| 7 | Ostrea densamellosa Lischke. | イタホガキ | + |
| 8 | " (Crasostrea) gigas Thunberg. | カキ | + |

- 9 *Pecten laqueatus* Sowerby.
イタヤガヒ + +
- 10 *Anomia lischkei* Dautzenberg et Fischer.
ナミマガシハ + + +
- 11 *Modiolus barbatus* (Linne).
ヒバリガヒ + +
- 12 " *hanleyi* (Dunker).
バンレイヒバリガヒ + +
- 13 *Brachydontes senhausi* (Reeve).
ホト、ギスガヒ +
- 異 靱 帶 目
- * 14 *Laternula kamakurana* (Pilsbry).
ウスギス +
- 完 靱 帶 目
- 15 *Trapezium japonicum* Pilsbry.
ウネナシトマヤガヒ +
- 16 *Chama cf. aspersa* Reeve.
キクザル +
- 17 *Cardium (Fulvia) muticum* Reeve.
トリガヒ + +
- 18 *Dosinia (Dosinella) bruguieri* (Gray).
ウラカヤミ +
- 19 " (*Dosiniscia*) *japonica* (Reeve).
カヤミガヒ + + +
- 20 *Cyclina sinensis* (Gmelin).
オキシヤミ +

縣市附近海岸の貝類

- 21 *Meretrix meretrix* (Linné).
ハマグリ + +
- 22 *Saxidomus purpuratus* (Sowerby).
ウチムラサキ +
- 23 *Paphia (Paratapes) undulata* (Born).
イヨスダレ + +
- 24 " (*Ruditapes*) *philippinarum* (Adams et Reeve)
アサリ + +
- 25 *Protothaca jedoensis* (Lischke).
オニアサリ +
- 26 *Tellina (Angulus) nitidula* Dunker.
サクラガヒ + +
- 27 *Macoma nasuta* (Conrad) (dissimilis Martens).
シラトリガヒ + +
- 28 *Macoma incongrua* (Martens).
ヒメシラトリガヒ +
- 29 " (*Rexithaerus*) *secta* (Conrad).
サギガヒ + + +
- 30 " (*Psammacoma*) *truncata* (Jonas).
アササギガヒ +
- 31 *Theora lubrica* Gould.
シヅクガヒ +
- 32 *Sanguinolaria (Nuttallina) nuttalli olivacea* (Jay).
イソシヤミ + + +
- 33 " (*Soletellina*) *boeddinghausi* (Lischke).
フヂナミ + +

昭 和 年 号

- 34 Sanguinolaria (Soletellina) adamsi (Reeve).
ムラサキガヒ + +
- 35 " (Psammotea) virescens (Deshayes) var.
オチバカヒ + +
- 36 Psammosolen divaricatus (Lischke).
キヌダアゲマキ + +
- 37 Solen gouldi Conrad.
マテガヒ + +
- 38 " grandis Dunker
オホマテガヒ + +
- 39 Mactra sulcataria Reeve.
バカマヒ + +
- 40 " veneriformis Reeve.
シホフキ + + +
- 41 Anatina (Raeta) magnifica (Yokoyama) var.
ヤチヨノハナガヒ(新稱) + +
- 42 Lutraria maxima Jonas.
オホトリガヒ +
- 43 Mya japonica Jay.
オホソガヒ +
- 44 Cryptomya elliptica (A. Adams).
クシケマスホ(新稱) +
- 45 Panope japonica (A. Adams).
オキナノメンガヒ(新稱) +
- 46 Barnea (Cyrtopleura) japonica (Yokoyama).
ウミダケ +

腹足類

- 47 Haliotis japonica Reeve (var).
トコブシ + +
- 48 Tegula (Chlorostoma) rustica (Gmelin).
コシタカカンガラ +
- 49 Umbonium giganteum (Lesson).
ダンベイキサゴ +
- 50 Littorina (Littorivaga) brevicula (Philippi).
タマキビ + +
- 51 Cerithidea rhizoporum A. Adams.
フトヘナタリ +
- 52 Thylacodes imbricatus (Dunker).
オホヘビガヒ +
- 53 Strombus (Gallinula) japonicus Reeve.
シドロ + +
- 54 Polinices (Neverita) didyma Bolten.
ツメタガヒ + +
- 55 Eunaticina papilla (Gmelin).
ネコガヒ +
- 56 Tonna luteostoma (Küster).
ヤツシロガヒ +
- 57 Fusinus perplexus (A. Adams).
ナガニシ +
- 58 Rapana thomasiana Crosse.
アカニシ +

59 Turris (*Asphenotoma*) *nivea* (Philippi).

後鰐目
キセノシタガタ +
60 *Philine japonica* Lischke.

淡水産

61 *Corbicula leana* Prime.

イシヤミ

三寶村

62 "*japonica* Prime.

イモトツギ

三寶村

63 *Viviparus* (*Cipangopaludina*) *maleatus* (Reeve).

ヤルタニシ

64 *Syncera japonica* (Martens)

カンザンセカガヒ

65 *Thiana* (*Melanoides*?) *loebbecki* (Brof).

タケノコカハニナ

亞米利加博物館遠征隊のゴビ沙漠に於ける

探檢の方法と結果

本篇は一九二六年六月廿三日倫敦地質學會に於ける講演の梗概でネーチニア八月七日號に掲載されたものである。

アンドリウスを主腦者とする蒙古遠征隊の發見に依りて、篇末に掲げた様な二十四階に分けられる生物地史中の一齣を闡明した中央亞細亞特に支那領トルキスタンの東部及び南東部地方は地質學・古生物學及地理學に關しては長く無識界として殘されてゐた。一九〇〇年に予は豫言して、南部亞細亞地方例へばファルコナー(一八三〇—五〇)に依り探檢せられた印度のシヅ

ソクの如き處よりも、寧ろ中部亞細亞の未知の高原地方が哺乳類の起源及び分布の主要中心地であり、北方の哺乳類は此處から起つて歐及北米の大陸に擴がつたといふことが證明されるに至るであらうと云つた。

一九二二年・一九二三年及一九二五年の三期に於けるアンドリウスの探檢は遺憾なく此豫言を證明してゐるのみならず、又高い中央亞細